

## シーボルト先生の追憶 (Siebold-Erinnerungen.)

エフ・エム・トラウツ

昭和十年の四月から五月に掛けて、フィリップ・フラ  
ンツ・フォン・シーボルト先生の遺物が、東京の上野に陳  
列された。品目は約八百點で、先生と其の遺族、日本の  
門下生と知友の著書、肖像、墨跡、遺物等に互つてゐる。  
而して總出品の約半数は、一九二七年以降、伯林日本學  
會の所藏に係るものである。この展覽會は頗る好成績を  
挙げ、十四日間に一萬五千人以上の參觀者を迎へた由で  
ある。

尙ほ此のシーボルト史料は、東大シーボルト教室に鄭  
重に保管され、一萬枚以上の寫眞に複製された。蓋し同  
年中に再び獨逸に送還される豫定だからである。

爾來日本では各種の新聞、雜誌、單行本、小冊子等が、  
先生の生涯、事業、著述、門下、交友などに就て、盛んに論  
文を掲げつゝある。百年以前に來朝して、眞に日本を熱

愛した獨逸の一醫師が、百年後の今日、斯くも多大の關  
心を持たれてゐるのを見るは、吾等の欣快である。

伯林から齎された此の史料に刺戟されて、日本の幾多  
の學徒が、シーボルト研究を一入深めるに至つた。故に  
私も亦、シーボルト家に就て知る所と、十五年來の先生  
研究事業の實相を、左に二三お話ししよう。

一八六六年の霜月の下旬、先生の遺骸が、ミュンヘン  
なる奥津城に送られてから、殆ど七十年に垂んとしてゐ  
る。巨匠シウワンターラアの手になる肖像を掲げ、形は  
佛敎の塔婆に似た記念碑が、先生の安息所を示してゐる。

先生薨去の時、長男アレクサンダー（一八四六年八月  
十六日生）は二十歳であつた。彼は年十三で學校を去り、  
五九年から六一年迄先生と一緒に日本に留まり、先生の  
歸國後も特に日本に残された。彼は來朝早々日本語の研

究を始め遂に空前の上達を遂げたことは、彼を識る程の人の均しく言ふ所である。舊士族出の父の門下生の古雅な言葉も、宮中や、學者や、外交官の専門語も、自由自在に操ることが出来た。

アレクサンダアには妹が二人あつた。ヘレーネは一八四八年に生れ、七一年にマクス・フォン・ウルム・エルバツハ男爵に嫁した。私は一九二八年、この男爵を其の居城に訪れた所、男爵は夫人が若き日の肖像畫を、伯林なる日本學會に寄贈し、且つ廣大な城中に保存される、岳父が無数の遺物を示されたが、その中には尺牘や書籍の外に、尙ほ極東の種子から發芽して、夫人が好みの窓下を飾る花卉類もあつた。

他の妹マチルデは一八五〇年に生れ、八〇年にグスタフ・フォン・ブランデンスタイン將軍に嫁した。

二弟ハインリツヒ(一八五二—一九〇八)及びマクシミリアン(一八五四—一八八七、サマラング駐在蘭領印度士官)等、先生の正室ヘレーネ・イーダ・フォン・ガーゲルン(一八二〇—七七)の生む所である。

ヘレーネとハインリツヒには子女なく、マクシミリアンは未婚で逝去した爲、現在シーボルト先生の令孫としては、ブランデンスタイン家に嫁した次女マチルデと、一八八九年エリザベート・フォン・ハスリンゲン・シツクフースをめとつた長男アレクサンダアの後裔ばかりである。

長孫アレクサンダア・フォン・ブランデンスタインは、ツエベリーン家の一粒種ヘレーネをめとつたので、一九〇九年伯爵に叙せられ、ブランデンスタイン・ツエベリーンを姓とするに至つた。その妹オルガは一九一九年、夫君ブランデンスタイン男爵を喪つて後は、令嬢と共にミュンヘンに居住して居る。

先生の長男アレクサンダアには三女一男があつた。乃ちエリカ(一八九〇年生)ヒルデガルト(一八九一年生)エーディット(一八九二年生)及びアレクサンダア(一八九六年生)である。このアレクサンダアは、祖父と父の稟質を受け、幼にして日本語の研究に志した。蓋し日本の大使館參事として、旭日大綬章を與へられ、一九一一年

伊太利國ベグリに於て、四十年に亙る日本の外交官の生涯を閉ぢた亡父、アレクサンダアの足跡を襲踏せむが爲であつた。が、大戦争勃發と共に、シーボルト家の命脈も絶たれてしまつた。一九一八年四月二十八日、祖國の爲の戦死が彼を俟つて居た。彼はシーボルト姓を稱へた最後の人であつて、その長姉エリカが一九二二年、ルドルフ・フォン・エールハルト男爵に嫁した外、二姉は猶ほ未婚である。

このエールハルト夫人は、一九二三年、私にブレスラウに來て、共に祖父の遺した文書を通覽する様に申越された。蓋し私は其の約一月前に、かの偉大な日本研究家の遺物が、猶ほ所藏せられて居るか否かを、豫め問合せたからである。

斯て同年五月の一日曜日、古い大きな長持の前に立つて、先生の生涯の、就中文政六一二年と安政六一文久元年の二回の日本滞在中の、勞作を片一片と取出す毎に、私は愈々驚きを大にした。而かも其の殆ど全部が此の度上野に陳列されたのである。

日本に在る先生の令孫山脇タカ刀自は、先生が一八二五年以降同棲せられた楠本其扇の生めるイネの女であるが、本年八十五歳の高齡を以て、同じく上野を參觀せられた。嘗て同刀自は其の想出を、感慨深く私に物語られたが、母イネのこと、及び安政六年から文久元年に亙つて祖父、並に叔父アレクサンダアと同居した時代の想出は、蓋しその壓巻であつた。

日本では夙にシーボルト研究が行はれ、先生の門葉は全國に散在する後裔を通じて、宗家の高風を千載に傳へむとしてゐるに反し、ファイリツプ・フランツ・フォン・シーボルトの名は、遺族と其の道の専門家を除く外、故郷では殆ど忘却に委ねられて居る。

故にブレスラウに發見した史料の價値は、私には明白であつたが、然しインフラチオンの際に、先生の著作刊行の冒險を敢てする書肆は、獨逸には絶無であつた。

一年は空しく經過した。一九二四年に至つて、F・W・K・ミュツラア教授が——私は當時その助手であつた——この史料を、伯林人類學博物館に賃借することになつ

た。私は其の無数の手控へや、大小幾多の雜記帳を、徐々に讀むことが出来た。毛筆で書かれた蘭語に親しむうち、度々出てくる珍奇な名詞の意味も、次第に解つて来た。而かも當時の伯林では、僅に、明治二十九年版吳教授著シーボルト先生略傳を見るに過ぎない有様であつた。

右史料の中で特に私の注意を牽いたのは、一八二九年の江戸參府紀行を含む先生の日記、かの豚革表装のフォリオバントであつた（日本人の手に成つて、西曆十世紀以前にさかのほるものは、姑く論外として）。東海道旅行記は、ケムプヘル、トウンベルク等の古い文獻の外に、尙ほ茲に、當時二十九歳の先生の手記に係る、貴重な一文獻が追加された譯である。

一九二七年、私の最年長の畏友であつて、一八六一年には海軍候補生として、又一八七五—八二年には普國辨理公使として、日本に駐在され、其の時八十六歳だつたアイセンデツヒア翁の盡力に依つて、伯林日本學會に於ける私のシーボルト研究は、多額の寄附金を受けることになつた。依て私は右の史料を、先生の令孫方から買入

れ、獨逸の國有物として、直に之を日本學會に寄贈した。斯て先生の遺物は、伯林に於て、この事に興味あり、この方面にたづさはる、内外の學徒に均しく公開される事になつた。

一九二八年の二月、先生百三十二回記念日の當日、右日本學會に於て、第一回の展覽會が催された。ウルム・エルバツハ男や、ブランデンスタイン・ツエペリーン伯が、貴重な肖像や、遺墨や、書物を多數貸與された。又私が吳教授のシーボルト先生傳第二版を手にしたのも、この時であつた。この展覽會も亦、幾多同好の日獨人士の參觀する所であつた。

日本並に歐米に普く認められてはるるが、不幸まだ刊行の落成を告げてゐない先生の日本研究 “Nippon, Art-  
dir. zur Beschreibung von Japan” は、一九二八年以來伯林エー・ワスマート書房が、自己の危険に於て出版を引受けた。之が編纂校訂には不肖私が當つた。この先生來朝百年記念刊行本には、一八六二年の江戸紀行が補遺として、他の手記と共に嚴密な校正を経て、完全に印行を

見たのであつた。

一九三一年私が、日本學を研究し、又二十六年來相見えない日本の畏友諸氏に再會すべく、二度目に來朝するに及んで、私のシーボルト事業も亦、中絶の止むなきに至つた。が、のち東都の吳教授と會見し、同教授から先生傳第三版の刊行に協力をすべく、強ひて索められるに至つて、私は再びこの廣汎な難事業に立戻つた。

然るに一九三〇年、私から恩師 F. W. K. ミュツラア教授の教示を永久に奪ひ去つた死の手は、一九三二年の早春、又吳教授から其の大著第三版完成の期を、永恆に奪ひ去つたのである。

扨て私は先生の令孫、在獨アレクサンダア・フォン・ブランデンスタイン・ツエベリン伯、及び在米エールハルト・シーボルト夫人と交通を更たにしてゐるが、シーボルト家の悲劇を物語る、同夫人の信書の一部を公開して、本文の結語に代へよう。

「父は一九一一年に亡くなりましたが、その時分から夙に世界の大戦争を豫知して居りました。父の晩年を暗黒

にした憂苦は、人様には痴人の杞憂と笑はれましたが、自分の子供が次の戦争で斃れるであらう、といふ豫感でありました。果して弟のアレクサンダアは、出生地のヴュルツベルクからバイエルンの野砲聯隊に志願して、伯國ケメルベルクの初陣で、名譽の戦死を遂げました。弟は其の時二十一でした。これがシーボルト家の最後の一人を襲つた、不測の運命で御座います。

父は日本から歸朝すると、古いお城や、その他凡て古い物に、大層愛着を持ちました。多分それが黄色い東洋と、いはゞ平衡を保つて居るやうに、見えたのでありませう。父は三つの古城、否、城趾を次々に修理して、古めかしく装へました。しかし若い妻を亡くして後は、長く田舎の寂寞に堪へられなくなつて、父は私達と一所不住の流浪生活を致しました。それに父は、幼い時分から世界旅行に出かけたせいか、いつも天際にあこがれ、日本に對して絶えず懐郷の念に襲はれるのでした。そして、遂ぞ獨逐の氣候に馴れることが出来ないで、冬を私達は大概南國で過しました。父は本當に慈悲深く、一

度も子供から目を離れた事がなく、それ故、私達の家庭は汽車の中だなど、私は申しましたが、全く其の通りで御座いました

妹と弟が寄宿舎に入つて後は、私一人が父の旅に附添つて、及ばず乍ら祕書の役目を致しました。父は其の時分、殆ど視力を失つてゐましたが、やはり任官の身の上で、まだまだ日本のお國に御奉公したい、と申して居りましたし、又寛大な日本のお上でも、父を閑職に左遷もなされず、父の死後は澤山のお金を御下賜になりました。只心残りなのは、父の死が早過ぎました爲、談話を書き集めておけなかつた一事で御座います。父は感じが深く、記憶も良ろしく、それに重大な時期に日本で生活致しました故、定めし立派な文化記録が出来たであらうに、と思ふことで御座います。

父は温情玉の様で大層快活で、しかも正直で聰明な人とされてゐました。その上、公平無私な性質ゆゑ、生涯敵は一人も御座いませんでした。もつと利己的な心があつたら、夙に一身代拵へて居た筈です。

私が生涯の方針を定めましたのも、やはり、親しく父と一緒に暮した年月のお蔭であります。就中私が蒲柳の質にも拘らず、親類の反對を押し切つて、學究生活に入りましたのも、父の賜物と存じます。獨逸で正式に教職に就いた夫人の中では、私が最初です。ドールバット、フライブルグ、ロストツクの大學や、カールスルーへの高工で、英學の講師や、後には私講師を致しました。が、獨逸では女は正教授になれないので、一九二四年に米國へ参りました。米國でも英學の講座を持つ獨逸人は、私一人で御座います。私は只今、面白い研究をして居ります。主として比較文學の仕事ですが、私は今迄に方々の國に住んで、方々の外交界に出入致しましたのは、此の上もない良い訓練でありました。私はアンクロ・サクソンの文化史を書くつもりですが、古い寫本を拜見します度に、幼い頃に住んで居た古城の面影が、まごまごと私の腦裡によみがへつて参るので御座います」云々。